

農機研究37年の歩み(その6)

誌名	農業技術
ISSN	03888479
著者	鏑木, 豪夫
巻/号	27巻6号
掲載ページ	p. 273-275
発行年月	1972年6月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



農機研究 37 年の歩み (その6)

鎗木 豪夫

19. 農機研の管理運営

わたくしは、設立以来理事長就任まで、研究検査担当理事として過ごした。研究所の設立に当り、わたくしよりもっとも心配したことは、農業機械の研究とこれに関連の深い、作物、土壌肥料、病害虫などの専門分野の研究とが断ち切られるか、あるいは疎遠になるということであった。設立と同時に、国立農業試験研究機関と研究所との業務分担ないしは連繫については、覚書が取りかわされたが、それでもわたくしは、「生木を裂いたのではないか」という後悔の念に近い思いに悩まされたのである。そのゆえに、国立場所との連絡には、自ら進んでこれに当り、また事あるごとに所員にも勧めてきたつもりである。

それにしても、独立の研究機関となった研究所は、確固たる研究目標をもたなければならぬ。小倉理事長の指示により、その検討が続けられてきたが、昭和39年2月に「研究の目標ないし重点」を決定した。この作業の幹事役となったのは、当時の主任研究員足利知己君（現農林省国際協力課長）であった。その要旨は、水稻作用機械とくに移植機と収穫機の開発改良に重点を置くとともに、あわせて畜産、園芸用機械の開発改良を行なうというものであり、この線に沿って鋭意研究が進められた。その結果、とくに稚苗用あるいは成苗用田植機とバインダあるいはコンバインの研究が結実して実用化の段階にはいった。一方、42年頃から米の過剰がようやく深刻化する背景の下に、やがて総合農政の展開が要望されるに至り、研究所においては、この情勢に対応すべく、畜産、園芸部門の機械・施設の開発改良研究の比重を高め、あわせて穀菽作用機械の完成をはかることとし、現在に至っている。

研究課題設定の手続きは、前述の研究目標に基づき、まず主任研究員単位に原案を作成し、各部ごとに、課題によっては部間の検討を経たのち、毎年1月に研究所全体として事業成績および計画検討会を開催して原案を作成する。次いでこの原案は、毎年2月に開催される技術委員会（関係官庁、大学、研究機関の専門家、メーカーの研究開発部門の担当者、農家などを構成メンバーとする）に諮られ、3月に開催される運営審議会の議を経たのち、所要の調整を施して決定される。課題設定に必要

な情報は、調査資料室および各部各室が日常活動として収集しているほか、農家、農業指導層、業界などに対するアンケート調査や、毎年度課題を定めて研究所幹部が出席して行なう現地検討会などを通じても吸いあげられる。

国立場所との連絡調整は、前述のようにとくに意を用いたところであるが、具体的には、農林水産技術会議事務局が主催する専門別総括検討会議、特別研究に関する検討会議、地域農試が主催するブロック会議などに、担当所員を派遣することにより行なわれるほか、中央、地域場所との現場試験を通じて行なわれる。また都道府県の農業、園芸、畜産関係試験場との連絡は、毎年3月上旬、技術会議事務局と研究所とが共催する打合わせ会議を通じて行なわれるほか、毎年度事業計画に基づき、都道府県試験場へ委託する研究を通じて行なわれるのが例となっている。

業界の研究開発部門との連絡、研究成果の普及は、まず毎年2～3回開催する研究発表会を通じて行なわれるほか、日本農業機械工業会が開催する機種別部会に担当所員を派遣することにより行なわれる。さらに、実質的な成果の普及方法としては、各企業あるいは団体からの要請による技術指導、受託研究があり、研究所の所有する登録あるいは出願中の特許・実用新案権は、発明考案実施契約などを締結して実施に移している。

このような事務的な慣行が確立するまでには、それ相当の紆余曲折とある程度の年数を要したことはもちろんである。

20. 業界との接触

農業機械の研究・検査・鑑定という仕事は、業界との関連なしに考えられないことは、いまさらいうまでもない。前述した各節にも、業界との関連事項が随所に見られるとおりである。しかし、業界との接触という単純であるが、なかなか神経を使うことがらである。あまり濃密になりすぎてもいけないし、反対にあまり冷淡であってもいけないのである。そのホドホドのところをつかむのが、なかなかむずかしいのである。それが、わたくしひとりならば、自分さえ気をつけていけばよいのであるが、多くの職員にそのニュアンスを伝えるのが、これまた甚だむずかしいことである。この問題には、農事試

験場から研究所を通じて、わたくしとして、もっとも気を使ったのである。幸い、職員全員が、節度を守る習慣を身につけてくれたので、安心して仕事を続けることができたのである。ここでは、業界人との接触で、とくに記憶に残っている2~3例を掲げてみようと思う。

前述したように、昭和28年以降、小形トラクタや防除機が伸び始めたころから、農機業界も一般的に躍進時代にはいった。と同時に、業界では技術者不足をきたし、他社の人材の引っこ抜きがさかんになり、そのトバッチリがわたくしにも及んできたのである。「先生、うちでも研究部を拡充しようと思っているのですが、どこかにいい技術者はいないでしょうか」といった話が、わたくしのところを持ち込まれるのであった。そんな仕事は、わたくしの所掌外のことで、ことわってしまえばそれまでであるが、知らぬ半兵衛を決めこんでいると、足元に火がつく恐れがある。つまり試験場職員の中から引っこ抜きが始まるのである。そこで、わたくしも自衛上多少の口ききをせざるをえない破目に陥ったのである。このような次第で、業界の技術屋さんのなかにも、わたくしが多少ともお世話をした方々が多くなったのである。

戦後、耕耘機の生産がさかんになった頃には、なんといっても岡山県がその中心であった。わたくしは、当時の岡山農試農機具主任であった故築山寛技師の要請で、なんべんとなく岡山市を訪ね、いまでいう技術指導を行なった。岡山に行くとき、当時、農機具工業組合理事長であった守安利夫氏が、大きな身体をゆすりながら、なにくれとなくお世話をください、メーカーと一堂に会合して講演をしたり、各工場を訪問したりしたものである。そうこうしているうちに、調製加工機の雄、井関農機K.K.が耕耘機の生産に乗り出した。あるとき井関農機の重役である薬師寺さん、水野さんなどがきて「わが社の耕耘機をちょっとでいいから見てください。そしてできるだけ欠点を多く挙げてください」という頼みである。聞いてみると、「井関社長は、今度の耕耘機は間違いないから、3,000台くらい量産するんだ」といい張って譲らないので、水を掛けてほしいというのである。さっそく圃場テストをしたり、簡単な構造調査をやったが、あまり重大な欠陥は見当らない。しかし、わたくしは、できるだけ欠点を挙げて、クソミソにけなしたのである。井関さんは周囲の面々を見廻しながら「これはおかしい」という顔をしていた。そこでわたくしは、ありていに本当の話をしたら、さすがの井関さんも「それでは初年度500台くらいの生産にしましょう」ということでケリがついた。井関さんもいい番頭さんをもって幸せなものだと、シミジミ思ったことである。

そのほか、耕耘作業中に歯車が欠けてエンコしたときの藤井康弘さん(当時の藤井製作所社長)、クイーンテイルのウォームがカミソリのように磨耗したときの内田兼太郎さん(当時の協和農機K.K.専務)などの苦悩のまなざし、改良形がうまくテストを終えたときのえびす顔など、昨日の出来事のように思い出されるのである。こんな話をしていると切りがない。それにしても、「研究所になってから、シキイが高くなった」という声が、メーカーさんの中から聞かれるようになったのは、わたくしとしては気がかりなことであった。それからとはとくにわたくし達は、メーカーさん方に研究所に出入りしてもらおうよう、誠心誠意努めてきたのである。

21. 学会のことども

前にも述べたように、わたくしの鴻巣入場と前後して、玉村君、松田君、西井君など新進気鋭の士が集り、いろいろ雑談しているうちに、あるとき学会を作ろうではないかという話が出た。さっそく二瓶さんや本田さんに相談したところ、関係方面に当たってみようということになった。昭和12年3月13日、東大農学部に関係者約20名が参集し、直ちに発起人会を結成し、全国にその賛否を問うたところ、賛成者多数を占めた。その後、数回にわたり発起人有志会を開き、会則、予算などの案を作成し、4月10日、東大構内第二食堂で創立総会を開催し、農業機械学会はその第一歩を踏み出したのである。

これより先、本田さんや二瓶さんは、「学会ができたならば、必ず広部先生を会長にしよう」といわれていた。当時、広部先生は早く農事試験場を退官し嘱託の身分であり、東大講師を兼務するという形で、不遇をかこっておられたのである。「もう一花咲かせたい」という両先輩の師弟愛には、わたくしも深く心を打たれたのである。創立総会で万場一致で会長(当時は理事長と称した)に推挙された広部先生は、声涙ともにくだる挨拶をされたのであった。散会后、広部先生は、われわれ若い者4名を、新宿の十二荘に誘われた。飲むほどに先生はご機嫌ななめならず、われわれを離そうとされないので閉口した。先生が丹前に着替えられたのをしおに、わたくし達は倉皇として料亭を出たのである。

その後、わたくしは農業機械学会の万年幹事であった。創立当時は、編集、庶務幹事などを歴任したが、二瓶さんのご指導でなんとか責を果してきた。広部先生が逝去されて、二瓶さんが第二代会長となられた。二瓶さんはいろいろと学会のため尽力されたが、「農業機械ハンドブック」を刊行されたことは特筆すべき功績である。会長が選挙制となって、第三代会長には庄司英信先

生（現東大名誉教授，東京農大講師）が就任された。わたくしは、この間、庶務担当理事として両先生を補佐したが、本務の方が忙しく、十分な補佐役となることができなかった。それにもかかわらず、43年4月、京都大学で開催された総会で、わたくしは第四代会長に推挙された。そして「産学協同」などという大それた施政方針を打ち出したが、46年3月任期が終わるまでに、なにほどのこともできず、第五代会長安田与七郎君（東大教授）にバトンをタッチしたのである。

よくいわれるように、わが国の農業技術は多労技術である。したがって、農作業合理化に関する研究は、他の先進諸国に比べてかなり遅れをとっていた。また専門別の学会においても、作業合理化に関する研究は軽視され勝ちであった。そこで、作物、園芸、畜産、養蚕、林業等の各分野にわたる同好の士が集まって、研究会を組織しようということになった。40年2月23日、西ヶ原の農業技術研究所で設立総会が開催され、日本農作業研究会が発足した。初代会長には戸町義次先生（現東大名誉教授，日大教授）が選出された。戸町先生は、東大定年退官を期に会長を辞任されたので、44年4月から46年3月にわたり、わたくしが第二代会長を勤めた。毎回の幹事会には各界の専門家が集まり、実に楽しい会合であった。わたくしは「この種の研究会は、原則として会長は一期で交代すべきである」と考えていたので、任期を終えると川廷謹造君（東大教授）に会長の席を譲ったのである。

22. 理事長として

昭和44年9月、立川さんが突然日本蚕糸事業団理事長として転任されることになり、わたくしがその後を襲うこととなった。まことに急転直下の人事移動であり、わたくしも心の整理にとまどったくらいである。役員人事が整ったのは、諸種の事情により少し手間どり、11月15日となった。すなわち、秋本監事には総務担当理事に、すでに理事に就任していた永野義治氏（元中国農試場長，現東邦亜鉛K. K. 顧問）には研究検査担当理事になっていたが、監事には保立陽太郎氏（元農林省厚生課長）が任命された。永野さんは研究者として名実ともに先輩であり、秋本さんも役人としての先輩であり、わたくしは内心じくじたるものがあったが、「男一匹、お引受けした以上は、全力投球で仕事を完遂しよう」と決意したのである。

理事長就任直後、ある新聞社の座談会で、立川前理事長と対談する機会があったが、そのとき立川さんは「研究所設立以来の7年間、わたくしは女房といた時間より

も、鎬木さんと一緒にいた時間の方が長かった」といわれた。この言葉には、さすがのわたくしも大いに恐縮した。それにしても、わたくしの理事長在任の間、秋本、永野両理事および保立監事の掛け値なしのご協力には、なんといって感謝してよいのか言葉が見当らないくらいである。わたくしは、就任の挨拶で「小倉，立川両理事長が敷かれた路線を、ただつっ走るだけである」と述べ、さらに「売家と唐様で書く三代目」という古諺を引用して、三代目のわたくしに対する支援を要請するなど、生来の呑気さをまる出しにしていたのである。

わずか2年有余の期間で、たいしたこともできなかったが、業界の要望もあって、すでに刊行していた「稲作機械化の方向」の続篇として、「園芸用機械の開発方向」、次いで「酪農機械化の方向」を新たに発表して指針の一助とした。また、定員の統一削減方針を一方ではのみながら、畜産、園芸用機械の研究単位を増設した。さらに、研究所もようやく創設時代を終わったという認識の下に、要望の高まっていた海外農業機械化施策に協力するため、本来の業務に支障をきたさない範囲で、努めて諸外国に所員を派遣したのである。また永年の懸案であった、招へい研究員を迎えることが実現したことを喜こんでいる。

研究所設立の日、わたくしは内心ホッとしたことを、すでに述べたが、いまにして思うと、このホッとした感じは、その後9年間にわたるわたくしの研究所生活に、安易さとマンネリズムを与えていたのかもしれない。もしそうだとしたら、わたくしは、ここに関係各位に対し心からお詫びをしなければならぬ。わたくしは、研究所退任の日、お別れの挨拶として「老兵は消えさるのみ」という意味のことを述べようと思っていた。ところが、その場に臨んでみると、この言葉には、現職を去ることに対する一種の抵抗感が含まれていることに気付いたので、これを取り止めて、通りいっぺんの挨拶をして引揚げた。挨拶をすませて自室に戻ってみても、退任したという実感はまだ湧いてこなかったのである。（完）

（前農業機械化研究所理事長）

鴨下・小坂・鈴木・岡本共著（第6版）

土壌の種類と施肥技術

B5判 268頁 価850円 千140円

——水田並びに畑——

- | | | | |
|-----|----------------------|----|----|
| 第1章 | 土壌の生成・変化…………… | 鴨下 | 寛 |
| 第2章 | わが国における土壌の分類…………… | 小坂 | 二郎 |
| 第3章 | 水田土壌の種類別性質と施肥技術…………… | 鈴木 | 孝平 |
| 第4章 | 畑土壌の種類別性質と施肥技術…………… | 岡本 | 春雄 |